

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

「あたしはルシネル・クレイター, 娘もルシネル・クレイター : フラナリー・オコナーにおける娘として書く行為

Tonegawa, Maki / 利根川, 真紀

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

29

(終了ページ / End Page)

54

(発行年 / Year)

2013-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008546>

「あたしはルシネル・クレイター、 娘もルシネル・クレイター」

—— フラナリー・オコナーにおける娘として書く行為

利根川 真 紀

序

フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor, 1925-1964) にとって長編小説は、それなりの枚数をかけて追究するに値する重い主題を扱い (O'Connor, *Habit* 349), 読者に注目されるべきものとして意識されていたため (375), 執筆にも思いのほか長い時間がかかった。オコナーの2つの長編小説はいずれも男性を主人公として^①, 宗教をめぐる葛藤を中心に展開される。6年間の執筆を経て出版された第1長編『賢い血 (*Wise Blood*)』(1952) では、ヘイゼル・モーツ (Hazel Motes) 青年が巡回牧師だった祖父を否定しようとして苦しみ、また7年間をかけて執筆された第2長編『烈しく攻むる者はこれを奪う (*The Violent Bear It Away*)』(1960) では、フランシス・マリオン・ターウォーター (Francis Marion Tarwater) 少年が、預言者だった大伯父を否定しようとして苦しむが、両者とも、最終的には否定しきれず、宗教を受け入れることになる。

これに対して、短編小説はオコナーにとって、読者や反響を意識しないで思いのままに書くことができる媒体として位置づけられており (*Habit* 375; Gooch 205), 比較的時間をかけることなく創作することができた。だが、読者を気にせず作品に没頭できたからこそ、オコナーの創作の原点が透けて見えてくるような一面が、それらの短編には見出される。書簡に明らかなように、身近な日常の出来事を観察する中から題材を得て書かれたそれらの短編作品では、しばしば未亡人の母と1人か2人の子供からなる家庭が取り上げられ、家

族の中の息詰まるような閉塞感が強調されているのが特徴的である。そして、そのような日常生活の場面に突如暴力が襲いかかり、人びとを驚愕させる。

オコナー作品に顕著な、この突然襲いかかる暴力をめぐる、批評家たちは様々な解釈を加えてきた。ドリーン・ファウラーは最近、それらの批評を概観したうえで、オコナーの独特の自己把握の仕方が暴力的な瞬間を必然的に招き寄せていると、前エディプス期を重視することでフロイト理論を修正した思想家ジュリア・クリステヴァやジェシカ・ベンジャミンを参照しつつ論じている(Fowler)。フロイトのエディプス理論では、他者からの分離や自立が高く評価され、自己と他者とは排他的な二項対立の関係にあると看做されるが、オコナーはこうしたフロイト的な自己を批判し、修正を加えているとファウラーは指摘する。彼女はオコナーの3短編——「作り物の黒ん坊 (“The Artificial Nigger”)」、 「グリーンリーフ (“Greenleaf”)」、 「長引く悪寒 (“The Enduring Chill”)」——の詳細な分析を通して、自己と他者のあいだの揺れ、自己と他者とが共存し、混ざり合いつつ差異化しつつあるような緊張状態を、オコナーが本来の自己のあり方として繰り返し描いている様子を明らかにしている。ただし、オコナーがそもそもそのような自己を描くに到った経緯については、敢えて考察を加えていない。

本論文は、その原因をオコナーが育った環境、特に母親との濃密な関係や南部における人種意識の変化に辿ろうとする試みである。それによって、娘として書くことは、オコナーにとってどのようなジレンマと強みをもたらしたのかについて考察したい。登場人物の子供の性別に着目すると、第1短編集『善人はなかなかいない (*A Good Man Is Hard to Find*)』(1955)では、母と娘の親子関係が多く取り上げられているのに対して、第2短編集『すべて上昇するものは一点に集まる (*Everything That Rises Must Converge*)』(1965)では、母と息子の親子関係が目立つようになり、焦点が移動している⁽²⁾。以下、第1節でオコナーにとって南部への帰還が意味したものを整理した後、第2節で母娘を扱った短編のパターンを検討する。第3節ではオコナーの人種意識を概括し、第4節では短編において母息子への移行によって何が変化したのかを確認し、最終的に作者オコナー自身にとって母親の存在が創作にどのような影響を与えたのかを明らかにしたい。

1. 南部への帰還

オコナーはジョージア州で生まれ育ち、20歳のときにアイオワ大学（State University of Iowa）の大学院文芸創作科で学ぶべく故郷を離れ、5年間北部の州に滞在するが、その後、体調を崩して病氣療養のため故郷に帰ることを余儀なくされる。翌1951年には、ジョージア州ミレッジヴィルの市街地にあったクライン屋敷から、郊外の農場アングルーシアに母と2人で移り住み、母に依存する生活が始まる。1952年夏には、自分の病名が父の命を奪った難病ループスであることを知らされ（*Habit* 37）、農場での母との暮らしが一時的なものではないことを悟り、その覚悟を示すかのようにこの頃から孔雀を飼い始める（43）。

この南部への帰郷に対するオコナーの反応は、メアリアット・リー（Maryat Lee, 1923-1989）によって共感をこめて記録されている。リーはニューヨークを拠点として活躍する同年代の劇作家だったが、南部に生まれ、南部社会の伝統や習慣を熟知していた（Cash 230; Gordon, “Maryat” 26; French）。2人は1956年末に初めて出会い、即座に意気投合する。ミレッジヴィルにたまに兄家族を訪ねることはあっても、保守的な南部に住むことなど到底考えられないリーは、帰郷を余儀なくされた当時のオコナーの心中を察し、思わず涙ぐむ（Lee 41-42）。しかしながら、オコナーは自己憐憫に浸ることなく、この逆境をバネにして創作に邁進することになった。1957年6月9日付のリー宛ての手紙には、「帰郷することは、ロープをかけられ、縛りつけられ、死に対して降参することを求められているかのように感じられ、それは創作、書くこと、何であれ仕事をする事の完全な終焉を告げるように思われたからなのですが、実際には、フェンスのところであなたに以前話したように、帰郷は創作の開始を告げたにすぎませんでした」（*Habit* 224）と書いている。また1957年7月16日付の別の女性作家への手紙にも、「20歳から25歳まで、創作活動は故郷を離れてのみ可能と思ひ込み、故郷から逃げていました。病気が重くなって帰ってこなければ、その幻想をきっとまだ抱いていたことでしょう。私の最高の仕事は、故郷でなされました」（230）と記している。1955年に、ミレッジヴィル帰郷後に執筆した作品を収録した第1短編集を出版し⁽³⁾、好評を得たからこそ、振り返って口にするのができた感慨と言えるかもしれない。

帰郷当初、創作活動が不可能と思われた理由を推測するとき、オコナーの名前をめぐるエピソードが思い浮かぶ。メアリ・フラナリー・オコナー (Mary Flannery O'Connor) として生まれた少女は、ミレッジヴィルの地元の女子大時代、作文にフラナリー・オコナーと署名しはじめ、創作の道を本格的に歩みはじめたアイオワの文芸創作科時代に、母の同意を得て日常的にフラナリー・オコナーの名を使うようになる。フラナリーとして北部で5年間生活・創作した彼女は、しかしながら、帰郷すると以前同様にメアリ・フラナリーと呼ばれつづけ (Cash 231)、地元の人は、フラナリー・オコナーと聞いても誰のことかわからず、「レジーナ・クラインの娘」と言われてようやく理解されることもあったという (Porter 66)。

創作を始めたときに、南部女性特有のダブルネーム (Gordon, *Flannery* 24; Gooch 121) の使用をやめ、フラナリーの名を選んで独り立ちしたつもりのオコナーだったが、少女時代から住み慣れた土地であり、また母方の家系が何代にもわたって暮らしてきた土地であるミレッジヴィルに戻り、農場で母に面倒を見てもらいながら創作しなければならないはめに陥ったとき、彼女が置かれたのは、つねに母の娘であることを意識しなければならない状況だったと言える。第1短編集では、このことを反映するかのようになり、10編中4編において母娘関係が中心に取り上げられている⁽⁴⁾。次節では、それら4編、「救うのはあなたの命 (“The Life You Save May Be Your Own”）」、「精霊の宿る宮 (“A Temple of the Holy Ghost”）」、「火中の輪 (“A Circle in the Fire”）」、「善良な田舎者 (“Good Country People”）」を具体的に取り上げながら、娘として書くことが、オコナーにとっていかなる困難を突きつけることになったのかを検証する。

2. 占有する母と抵抗する娘

母娘関係を扱った最初の短編「救うのはあなたの命」は、1952年にミレッジヴィルで着手され、執筆途中にオコナーは自分の病名を知ることになり、秋に脱稿する (Fitzgerald 1246)。作品の中で、母親は15年前に夫を亡くし、今では30歳近い娘 (O'Connor, *Complete* 151)⁽⁵⁾ と人里離れたプランテーションで暮らしている。太陽までもが自分の所有物であるかのようにふるまう母親 (146) は、「あたしはルシネル・クレイター、娘もルシネル・クレイター

（“Name Lucynell Crater and daughter Lucynell Crater”）」（147）と名乗り、あたかも娘をも占有しているかのようである。夫の死後、自動車も故障して動かなくなり、母と娘は外の世界から切り離された空間で生活している。母と娘だけの暮らしでは、健全な成長が阻まれ、時間までもが静止しているかのように、母は娘の年齢を15, 16歳と告げる（151）。また、同名の母から独立した自己を所有できないことを示すかのように、娘は1度も言葉を発したことがない設定になっており、言葉の獲得には、母からの独立が不可欠であることを象徴的に示唆しているようでもある。このプランテーションを訪れた男性トム・T・シフトレット（Tom T. Shiftlet）は、知的障害をかかえるこの娘に「鳥」という言葉を教え、自動車を修理して娘を外の世界に連れ出す。この短編では、娘を嫁がせることに心を砕きつつも子離れできずにいる母が、ハネムーンに旅立つ娘の乗る車にしがみついて涙を流し、母が娘と一心同体である様子が強調されている。

When they were ready to leave, she stood staring in the window of the car, with her fingers clenched around the glass. Tears began to seep sideways out of her eyes and run along the dirty creases in her face. “I ain’t ever been parted with her for two days before,” she said. (154)

オコナー自身の生活に目を転じると、12歳までは生まれ故郷のジョージア州サヴァナで家族3人で暮らし、13歳のときに父の仕事の都合で一家は一時アトランタに移り住むが、都会に馴染めず（Gooch 65, 69）、その後母と娘は母の実家があったミレッジビルに引っ越し、父は週末に合流するだけとなった。サヴァナ時代から母が家庭を切り盛りする生活だったが（Cash 8, 10-12）、オコナーが15歳のときに父が病死し、母と母の姉妹である2人の未婚の叔母からなる女性ばかりのクライン屋敷でオコナーは成長することになった（28-29）。ナンシー・チョドロウは『母親業の再生産——精神分析とジェンダーの社会学（*The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*）』（1978）において、前エディプス期を重視する対象関係論を援用して、子育てが家父長制社会においてひとえに女性によって担われているがゆえに、娘と息子とでは、異なるプロセスを経て自己形成がなされることを論じて

いる。「自らのエディプスの願望を一層徹底して抑圧、断念しなければならない」(Chodorow 134) 息子の場合とは異なり、娘の場合、「母親との同一化や連続性から生じる安心感は、母親からの独立という切実な欲求や前エディプスの色合いの濃いアンビヴァレントで依存的な関係からの脱出の願望とぶつかり合い」(136)、この葛藤は生涯続くことになるという。オコナーは一人っ子であり、さらに母が過保護だったことも相俟って (Cash 12-13, 17, 25, 30)、成長の過程で母からの距離の取り方に苦勞することになり、さらに父の死後には母子家庭となることによって、ルシネル・クレイターの物語に見られたように、母からの分離はさらに困難さを増したと考えられる。

特に、オコナーが育った南部社会においては、時代につれて変化しつつあったとはいえ、女性らしさの規範が強く順守されており (Westling, *Sacred* 8-64; Prown 14, 164)、20 世紀南部に育った中流階級以上の白人女性たちは「美しいふるまいがなにより大事 (“Pretty is as pretty does”)」をモットーとして繰り返し聞かされ、「美しくふるまうこと (“doing pretty”)」の重要性を教え込まれた (Hendin 12-14; Gordon, *Flannery* 13-14, 20-21)。オコナーの母レジーナは、ミレッジヴィルの旧家の出身だったことも手伝って、娘を「サザン・ベル」、「サザン・レディ」という表現によって示されるような南部女性らしい淑女に育て上げようという思いが強かったと言われている (Cash 40-49; Gooch 27)。

外見にこだわり、話術や社交術にたけた「レディ」をオコナーは作中に数多く登場させただけでなく (Whitt, “Flannery”), こうした既成のジェンダー観を押しつけられた娘の側の反応を、短編「火中の輪」や「聖霊の宿る宮」に鮮やかに描き出している。どちらの作品でも 12 歳の娘が女性らしさの規範を窮屈に感じ、両性具有への憧れを示す。特に「聖霊の宿る宮」(初出 1954 年) で見世物小屋の両性具有の話に魅了される 12 歳の少女は⁶⁾、同じ南部作家カーソン・マッカラズ (Carson McCullers, 1917-1967) の『結婚式のメンバー (*The Member of the Wedding*)』(1946) に登場する 12 歳の少女フランキー・アダムズ (Frankie Addams) を髣髴させ、当時の南部社会で白人女性に許されていた行動規範の偏狭さを印象づける。オコナーは自分自身、12 歳に永遠にとどまり続けるつもりだったことを、後年、女性の友人に宛てた手紙 (1956 年 2 月 11 日付) の中で告白している。「12 歳のときに、これ以上年をとらないと心に決めました。どうやって止めるつもりだったのかは覚えていませ

ん。13歳以上を指す「ティーン」という言葉は、嫌悪を呼び起こすあらゆるものに結びついていました。その年齢の人に見るものを、どうしても肯定できなかったのです。……私は13歳から20歳までの期間をひどく不機嫌に過ごしました……」(O'Connor, *Flannery O'Connor: Collected* 985)。この年頃の娘を悩ませる問題とは、成長することが広い世界への旅立ちとしてではなく、女性という窮屈なカテゴリーに囲い込まれ、自立を阻止されるように感じられるという矛盾である。オコナー作品においてそれは特に、娘が自分を抑圧する母親と同じ轍を踏む選択肢しかなく見えるという陥穽として描き出されている。

短編「火中の輪」では、視点人物は思春期を迎えた12歳の娘であり、娘が母親とのあいだで感じる強烈な緊張感、小説冒頭から周囲の森の風景にまで漲っている——「その子供には、表情を欠いた空が要塞の壁を圧迫していて、今にも突破するかに見えた（“The child thought the blank sky looked as if it were pushing against the fortress wall, trying to break through.”）」(Complete 176)。母が周囲の広大な土地を完全に所有・支配している様子は、その上の空まで自分のものと思いついでいるのではないかと揶揄されるほどである(186)。火事を心配しつつける母への反発から、母には美しく見える夕陽が、娘にはあたり一面を燃え上がらせる火の玉に見えることもあり(176, 184, 184)、母と娘の心理的な緊迫の度合いが読者には否応なしに伝わる。母親と2人で暮らすこの大きな農場に、ある日3人の13歳の少年たちが現れ、母と少年たちとのやりとりを娘は2階の窓から執拗に観察しつつける。

娘は母への反発から、時に少年たちの野放図な行動を支持するような反応を示し、2階の窓から思わず身を乗りだすと、目を寄り目にして舌を突きだし、大きく吐くような音を立てるといふ淑女らしくないやり方でそれを表明する。しかし少年たちから「ちえ、女がもうひとりいやがる（“Jesus... another woman”）」(185)と侮蔑の言葉を投げつけられ、娘は「顔を思いっきり殴られ、誰にやられたのかもわからないかのような（“as if she had been slapped in the face and couldn't see who had done it”）」(185)思いをする。思わず仕返しをしてやると息巻く娘に対して、母は「レディは人をぶちのめしたりしないものですよ（“Ladies don't beat the daylight out of people.”）」(185)と諷める。1度だけサリー・ヴァージニア(Sally Virginia)という南部特有のダブルネームで呼ばれるこの子供は、作者によって冒頭から「その子供（“the

child”）」と呼ばれ、性別は敢えて前面に出されない。少年たちに思い知らせようと、ドレスの上にオーバーオールを着こみ、男性用のフェルト帽を目深に被り、2丁の拳銃を手に追いかけるこの子供は(190-91)、「あたしを放っておいて。いいから、放っておいて。あたしはあなたじゃないんだから (“Leave me be. Just leave me be. I ain't you”）」(190)と母との違いを決定づけようとする。だが、少年たちが母の敷地に火を放つクライマックスの2つの段落(192-93)において、この子供は一貫して「彼女 (“she”）」と表現されて娘であることが強調されるようになり、最終的には自分が無力であり、母親もまた同様に無力な存在にすぎないことを、娘が自覚するところで物語が終わる。

同様のパターンは、短編「善良な田舎者」でも繰り返されている。32歳の娘は遠くの大学で学び、哲学の博士号まで取得したが、心臓の病で長く生きられないことがわかって母の家に戻り、2人で暮らしている。この作品と「対をなす作品 (“companion pieces”）」(Chew 17)とされる短編「救うのはあなたの命」同様、ここでも名前と自己形成とが密接に関わっている。母の元を離れていた21歳のときに、娘は敢えて相談せずに自分の名前をジョイ (Joy) からハルガ (Hulga) に変えたのだ。

She saw it as the name of her highest creative act. One of her major triumphs was that her mother had not been able to turn her dust into Joy, but the greater one was that she had been able to turn it herself into Hulga. (*Complete* 275)

しかしその甲斐もなく、母は娘をジョイと呼び続ける。娘が10歳のときに狩猟事故で片足を失い、義足をつけるようになったという現実に向き合うことができないまま、母は32歳の娘を依然として子供扱っている(274)。家に来客があると、娘と母は互いに監視し合い、居間での会話を台所で立ち聞きしたり(279)、門のところで立ち話する様子を屋敷の中から目で追ったりする(281)。プライバシーのないこうした空間での暮らしを強いられる娘の自己形成の困難さを告げるかのように、娘の名前は小説の地の文でジョイと呼ばれたりハルガと呼ばれたりして一貫せず、1度は「ジョイ／ハルガ (“Joy-Hulga”）」(275)と呼ばれさえしている。

娘は、現実に対して皮相な反応しかない自己欺瞞的な母に対して侮蔑を隠

すことができず、そんな母から距離を取ることで自分のアイデンティティを確立しようとしている。哲学的な思考によって自分はすべてを見抜いていると考えて自分の優位を疑わず、世間知らずに見える聖書売りの青年マンリー・ポインター (Manley Pointer) を誘惑してやろうと目論むが、誰の前でも外したことがなかった義足を男が取り去ると、返してくれるよう懇願し、思わず「あなたは、だって……善良な田舎者なんでしょう (“Aren't you ... aren't you just good country people?”)」(290) と言い放つ。母がつねづね優越感から口にするのを聞いて軽蔑していた、まさにその言葉を自分でも咄嗟に繰り返してしまい、自分が母と同類であること、また男性的な力を前に母も自分もなすべなく、無力な存在であることを思い知らされることになる。

Without the leg she felt entirely dependent on him. Her brain seemed to have stopped thinking altogether and to be about some other function that it was not very good at. Different expressions raced back and forth over her face. Every now and then the boy, his eyes like two steel spikes, would glance behind him where the leg stood. (289)

義足を失うことは、母の磁場から移動する自由を完全に奪われることをも意味し、この場面で、無防備になった娘に押し寄せる無数の感情は、あらためて母の家で「ジョイ／ハルガ」として生きていくことの苦境を物語っている。

精神分析がフロイト的の自己のあり方に修正を加え、対象関係論に注目しはじめたのは、イギリスにおいては1930～40年代から、またアメリカにおいてはほぼ1960～70年代になってからである (Benjamin 247-48)。オコナーは、フロイトに関しては一通りの知識はもっていたと思われるものの、それ以上の関心は跡づけることはできない⁽⁷⁾。本節で検討した1950年代前半の諸短編において、前エディプス的な独特の自己のあり方を繰り返し自分のテーマとして扱い、対象関係論への洞察を直感的に先取りしていたとすれば、それは故郷の街はずれの農場で母と生活空間を共有しなければならなくなったことによって、オコナーが子供時代からの母との確執を再体験し、この違和感を直視せざるえない状況に追い込まれたからだったと言えるだろう。

3. オコナーの人種意識

オコナーは39歳で死去する直前まで第2短編集の構想を練り、執筆作業を続け、死の翌年に『すべて上昇するものは一点に集まる』（1965）が出版された。第1短編集とは異なり、この短編集では次節に見るように、焦点は娘から息子へと大きく移動し、9作中4短編において母親と息子の親子関係が中心に描かれている⁽⁸⁾。ただしその一方で、第2短編集のもう1つの大きな特徴として、メアリをダブルネームの一部として持つ女性人物たちが登場してくる。「森の景色（“A View of the Woods”）」（初出1957年）のメアリ・フォーチュン・ピッツ（Mary Fortune Pitts）、「長引く悪寒（“The Enduring Chill”）」（初出1958年）のメアリ・ジョージ・フォックス（Mary George Fox）、「啓示（“Revelation”）」（初出1964年）の名字不明のメアリ・グレイス（Mary Grace）である。さらに短編集には未収録だが、同時期に執筆された短編「パートリッジ祭（“The Partridge Festival”）」（初出1961年）には、名字不明のメアリ・エリザベス（Mary Elizabeth）、「第3長編の一部として構想されていた断片「なにゆえ諸々の国びとは騒ぎ立つ（“Why Do the Heathen Rage?”）」（初出1963年）にはメアリ・モード・ティルマン（Mary Maud Tilman）が登場する。ダブルネームによって南部性を強調されるこれらの女性登場人物たちは、家父長制の板挟みとなって祖父に殺される9歳の少女、濃厚な母と弟の関係を揶揄する小学校校長で独身の姉、診療所の待合室で偶然一緒になった婦人と自分の母が示す階級の人種の優越感への憤りから、暴力をふるって病院に送られる帰省中の女子大生、街の風習に反抗した殺人犯に共感を示すべく訪問した精神病院で性的な嫌がらせを受ける帰省中の女子大生などである。主人公になることは少ないものの、いずれも家族や地域の閉塞感に敏感に反応し、抵抗する人物として描かれており、また母と対峙する場合にも間接的で距離がある様子が示され、やや社会性を帯びた描かれ方をしているという共通点がある⁽⁹⁾。彼女たちは、周囲の社会について、その偏りや狭さを露わにする機能を担わされていると言えるだろう。

これらの作品は、1956年9月初旬に完成した短編「森の景色」（Fitzgerald 1249）を除くと、1956年末のメアリアット・リーとの出会いの後に執筆されており、これらのダブルネームをもつ女性たちは、作者メアリ・フラナリー・

オコナーの分身であると同時に、メアリ・アタウェイ (Mary Attaway) の名を自らメアリアットに変更した (Cash 231) リーの分身でもあるように思われる。短編「啓示」に登場するメアリ・グレイスは、ウェルズリー・カレッジ (Wellesley College) の女子大生という設定だが、マサチューセッツ州にあるこの私立大学はリーの母校でもあり、実際、オコナーはリー宛ての手紙 (1964年5月21日付) の中で、「メアリ・グレイスにはあなたも一役買っているのよ」と書いており (*Habit* 580; Cash 235-36), 執筆にあたってこの友人を意識していた痕跡がある。

折しも、リーと出会う2年前の1954年には、公的教育施設における人種隔離政策を違憲としたブラウン判決が下され、これを受けて1960年代中頃には一連の公民権法が成立することになり、南部の人びとはこの時期、人種を巡って大きな意識変革を迫られつつあった。オコナーは、極めてラディカルな人種意識の持ち主だったメアリアット・リーと出会うことによって、この時期、厳格に階層化された南部社会において、上流中流階級の白人女性としていかに生き、南部の現状に直面するかという問題を共有する友人を得ることになった。その結果、オコナーは人種意識の改変を通して、保守的なままに留まっている母親を客観的に見る余裕が増し、作品にも重要なモメントとして人種問題への言及が含まれるようになり、それに伴って一見逆説的に見えるのだが、母娘関係から母息子関係へと焦点の移動が生じたのではないかと推察される。

オコナーが生まれ育ったのは、まさにジム・クロー法による人種隔離政策時代の南部だった。ジョージア州サヴェーナでは、様々な生活施設が人種ごとに隔離されており、彼女が通学した2つの小学校はいずれもカトリック系だったが、カトリック教会も白人用が4つ、黒人用が3つと分かれていた (Cash 2, 13-16; Gooch 16-17, 28, 40-41)。一時居住したジョージア州アトランタも人種隔離されており、オコナーはここでも白人だけの学校に通ったという (Gooch 63)⁽¹⁰⁾。その後移り住んだ母の生まれ故郷ミレッジビルは、ジョージア州の旧都 (1804-1868) だったこともある歴史のある街で (Gordon, *Literary* 23), ここでもやはり学校や墓地などが人種隔離されており、白人優越主義団体KKKの活動も盛んだった (Gooch 53-54, 244)。1942年から45年まで彼女が在籍した地元のジョージア州立女子大学 (Georgia State College for Women) も、当時は白人学生のみを対象としていた。黒人女子学生が入学を許可されたのは、ようやく1964年になってからのことであり⁽¹¹⁾、これは折しもオ

コナーが死亡した年だった。

やがて5年間（1945-1950）のみだったが、オコナーはミレッジヴィルを離れ、この間に南部では体験し得ない人種関係にも触れることになる。彼女が学んだアイオワ大学では人種隔離が完全にないわけではなかったものの、文芸創作科のクラスメートの中には黒人男子学生も1人だけ在籍していた（Cash 83-84; Gooch 131）。オコナーはまた、同じく院生だった黒人女性とも親しくなり、母からの反対にあったことが知られている。

W. A. Sessions reports that the young Flannery O'Connor became close friends with a black woman who was a fellow graduate student at the University of Iowa. When Mrs. O'Connor warned her daughter that such interracial contacts were dangerous, Flannery replied heatedly that her friendships would not be fettered by racial considerations. (Wood 102)

彼女が1948年から翌年にかけて滞在したニューヨーク州サラトガ・スプリングズにある芸術家コロニーとして有名なヤドー（Yaddo）でも、1941年から人種統合に踏み切っていた（McGee 10-11, 19-21）⁽¹²⁾。

オコナーの人種意識については、その革新性が指摘されたり、逆に差別意識が指摘されたりする（Gordon, *Flannery* 236-44; Cash 148-55; Gordon, “Maryat”; Walker）。人種についての言及が多いと言われるメアリアット・リーとの書簡が一部しか出版されていない事情もあり、詳細についてはさらに研究が必要である。ただし、人種に基づく「分離すれども平等」を合法とした最高裁判決、いわゆるプレッシー対ファーガスン判決の年に生まれ、保守的なミレッジヴィルでの暮らしが長かった母親レジナ・クライン・オコナー（Regina Cline O'Connor, 1896-1995）と比較するとき、しばしば取り沙汰される母親の黒人差別意識と、娘フラナリーの人種意識とのあいだに、乖離があったことは確かである（Gooch 243-44; Cash 148-49）。オコナーは母を刺激しないよう、母の前では人種問題を話題にしないように、訪問客に前もって忠告していたと言われている（Wood 117; Gooch 332）。1959年に黒人作家ジェームズ・ボールドウィン（James Baldwin, 1924-1987）を自宅でもてなす意向があるかどうか尋ねられた際には、ニューヨークでなら可能だがミレッジヴィルでは

自分が暮らしている社会の慣習を守らなければならないので無理な話だ、と手紙で断ったことがあり、この手紙はオコナーの人種意識を物語る証拠としてよく引き合いにだされる (*Habit* 329; Wood 114; Gooch 334-35)。しかしながら彼女は、自宅でボルドウィンをもてなせないことを心苦しく思っていたとも伝えられており (Wood 112)、同じ家で暮らす母の人種意識への配慮ゆえの拒絶であったと理解することもできる⁽¹³⁾。

同じく南部で長年母親と2人暮らしを続けたユードーラ・ウェルティ (Eudora Welty, 1909-2001) も、1940年代に黒人作家ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes, 1902-1967) と地元のミシシッピ州ジャクソンで仕事を共にする可能性を打診された際に難色を示したことがあった (Marrs 153-54)。ウェルティはまた、黒人作家ラルフ・エリソン (Ralph Ellison, 1914-1994) とともに1940年代から親交があったにもかかわらず、ジャクソンで起きた黒人活動家メドガー・エヴァーズ (Medgar Evers) 殺害事件の興奮冷めやらぬ1963年7月には、エリソンのテレビ・インタビューに応じようとしなかった⁽¹⁴⁾。いずれも、彼女が介護を必要とする同居の母に気兼ねし、母を気遣ったからだったとされている (Wood 114; Marrs 154, 303-05)。オコナーと同年代の南部作家エリザベス・スペンサー (Elizabeth Spencer, 1921-) も、1955年にミシシッピ州で起きた黒人少年エメット・ティル (Emmett Till) 殺害事件をめぐる口論が元で、両親とのあいだに埋めることのできない溝を抱えることになった悲痛な経緯を、回想録の中で語っていた (Spencer 286-98)⁽¹⁵⁾。

これらの作家たちの例から、公民権運動の高まりの中で、この時期の南部では、人種意識に関して娘は母に対して違和感を覚えることが多くなっていったことが窺える。特に人種隔離政策期において、「人種間のエチケット (“racial etiquette”)」が家庭内で母から娘に教え込まれることが多かったことから (Ritterhouse 19, 25, 55, 80-81; DuRocher 20-21)、人種間の複雑な諸ルールを教え込まれた幼少時のトラウマやその当時痛感した理不尽さや後年抱くことになった罪悪感は、しばしば南部白人女性の回想録において、母への愛憎半ばする思いとないまぜになって主題化されることが少なくなかった⁽¹⁶⁾。言い方を変えれば、ここに娘が母から距離を取る際の1つの契機が潜んでいて、この時期の南部の娘たちは人種問題を梃子にすることによって、母との関係を再考する手掛かりを掴むことができたとも考えられる。

4. 息子という「仮面」

オコナーの第2短編集では、「グリーンリーフ (“Greenleaf”)」, 「長引く悪寒 (“The Enduring Chill”)」, 「家庭の安らぎ (“The Comforts of Home”)」, 「すべて上昇するものは一点に集まる (“Everything That Rises Must Converge”)」の4作品において、未亡人である母親と息子の親子関係がクローズアップされる。いずれにおいても、成人した独身の息子が母の家に住み続ける設定になっている。短編「グリーンリーフ」に登場するミセス・メイ (Mrs. May) の2人の独身の息子たちは、日頃から不平を言うものの、一向に自分から母の家を出て行こうとはしない——「口先ばかりで、彼は出て行こうとしたことがなかった。パリやローマの話もしたが、アトランタにさえ行こうとはしなかった (“But in spite of all he said, he never made any move to leave. He talked about Paris and Rome but he never went even to Atlanta.”)」(Complete 319)。母親も息子たちに早く結婚して独立して欲しいと口では言いつつも、子供たちを守るの自分だけだと過信している。短編「家庭の安らぎ」においても、35歳の独身の息子トマス (Thomas) は母に反発しつつも、なにかと理由をつけて出ていくことができずにいる。

He did not know where a suitcase was, he disliked to pack, he needed his books, his typewriter was not portable, he was used to an electric blanket, he could not bear to eat in restaurants. (383)

ただし息子たちは、母から独立した自分だけの空間を維持しようと懸命に足掻いてもいる。短編「すべて上昇するものは一点に集まる」の息子ジュリアン・チェストニー (Julian Chestny) は、母が入ってくるができない「心の中の小部屋 (“the inner compartment of his mind”)」(411) にしばしば逃げ込み、自分を必死で守ろうとする。

This was a kind of mental bubble in which he established himself when he could not bear to be a part of what was going on around him. From it he could see out and judge but in it he was safe from any kind

of penetration from without. It was the only place where he felt free of the general idiocy of his fellows. His mother had never entered it but from it he could see her with absolute clarity. (411)

彼は自分では母の支配から自由であると自惚れているが、敢えて心の中でそう主張しなければならないところに、実際はそうでない様子が見て取れる。

Most miraculous of all, instead of being blinded by love for her as she was for him, he had cut himself emotionally free of her and could see her with complete objectivity. He was not dominated by his mother. (412)

オコナーの描く息子たちは、母からの分離・独立を遂げたエディプス的な自己というより、むしろ第2節で考察したような、つねに母との分離と融合のあいだを行き来するとされる娘の自己に近い。この意味では、第2短編集においてもオコナーが描こうとしているのは母と娘の関係であり、それを息子という「仮面」を用いて描いていると言えるのではないだろうか。

オコナーに「仮面」の使用を促した理由を考えると、娘と母の親子関係を描いた場合との大きな違いが2点浮かび上がってくる。まず1点目として、息子と母を扱った4作中3作において、母を襲う息子の暴力が描かれ、最後に母が突如死ぬことになる物語展開を挙げることができる。短編「すべて上昇するものは一点に集まる」では、息子が抱く母への鬱積した思いが間接的に母の死をもたらしたようにも解釈できる展開になっており、短編「家庭の安らぎ」では、かつてのプライベートを取り戻そうとする息子の発砲した銃弾が誤って当たって母が死亡する。短編「グリーンリーフ」では、2人の息子が母の農場を手伝わないことが間接的原因となって、母は突進してくる雄牛の角に刺し貫かれて死に至る。

2点目の相違として、母への愛情や母のかけがえのなさが、息子による場合のほうが率直に表明されていることも特徴的である。娘の視点からは、同性としての悲哀は描けても、母への愛情を素直に表現することはどうしてもできないようなのだが、対照的に、後に見るように短編「すべて上昇するものは一点に集まる」のジュリアンも母への愛を自覚するに到り、また短編「家庭の安ら

ぎ」のトマスも母への愛に自覚的である——「トマスは母を愛していた。そうすることが彼にとって自然だったから彼女を愛していたが、母が自分に向ける愛には耐えられなくなるときもあった（“Thomas loved his mother. He loved her because it was his nature to do so, but there were times when he could not endure her love for him.”）」(385)。かたや母親の眼差しも、娘より息子に対してのほうが、ともすると暖かい。母親たちは、哲学で博士号を取得した娘は持て余しても（「善良な田舎者」）、地元の歴史を研究する息子（「家庭の安らぎ」）や地元の大学で教鞭をとる息子（「グリーンリーフ」）や作家志望の息子（「すべて上昇するものは一点に集まる」と「長引く悪寒」）に対しては、完全に理解はできないまでも、ひとまず応援しており、周囲に対して自慢しさえしている（276, 389, 317, 410-11, 362-63, 365）。

これら2点の特徴を総合すると、娘と母の場合よりも息子と母の場合のほうが、母と子のあいだで展開される愛憎のドラマが一層ダイナミズムを増していると言えるだろう。娘の場合には、母への反発は、娘が母と同様に女性であることの無力さを男性から思い知らされる結末に収束しがちだったからである。第1短編集で、娘が母とのあいだで経験する分離と融合の揺れのダイナミズムに、自分なりのテーマを見出したオコナーは、第2短編集では、この独特の自己のあり方をさらに積極的に、正面から追求すべく、社会的により多くの選択肢が用意されている息子という「仮面」を利用することに思い至ったと考えられる。

ここで看過できないのは、息子が母親に抵抗するとき、母の人種意識を刺激する形をとっていることである。短編「グリーンリーフ」に登場するミセス・メイの36歳の息子スコフィールド（Scofield）は、儲けが多いという理由から黒人相手の保険外交員を続けており、母親が嫌がるのを承知でわざとそのことを吹聴する（315）。短編「すべて上昇するものは一点に集まる」においては、ジュリアンの母は、200人の奴隷を所有する祖父のプランテーション屋敷で黒人乳母キャロライン（Caroline）に面倒をみてもらっていた裕福な子供時代を鮮明に記憶している人物であり（408, 409, 420）、公共交通機関における人種統合が進み、「天地がひっくり返った（“the bottom rail is on the top”）」（407）現代に心理的なわだかまりを隠すことができずにいる。去年大学を卒業した作家志望の息子は、母親の人種意識がいかにか時代にそぐわないものかという「教訓（“lesson”）」（413, 414, 416, 416, 416, 417, 419, 419）を機会を見つ

けては説くことによって、日々の鬱憤を晴らそうとしている。これ見よがしに黒人への差別意識の無さを誇示することによって、彼は、母との「対決をはっきりと宣言でもしたかのように、いつもの緊張が突然なくなるのを感じた (“He felt his tension suddenly lift as if he had openly declared war on her.”) (412)。彼は自らの人種差別意識を意識化しないまま、母を嫌がらせるためだけに、黒人にわざと話しかけてみたり、あるいは空想の中で、黒人の医者と呼ばなければならない場合や、結婚相手として美しい黒人女性を家に連れてきた場合の母の拒否反応を思い描いて悦に入ったりしている (414)。最終的にジュリアンの母親は、昔ながらの白人の習慣から、1セント硬貨をバスに乗り合わせた黒人の子供に与えようとして、子供の母親に殴り倒されて死に至る。この期に及んで、ジュリアンは自分がいかに母に精神的に依存していたかに気づき、「母さん！……お願いだから、ああ、待って (“Mother! ... Darling, sweetheart, wait!”)」、「ママ、ママ！ (“Mamma, Mamma!”)」(420)と母を求めて叫び、小説の末尾で、彼は「罪悪感と悲しみの世界の入り口 (“his entry into the world of guilt and sorrow”)」(420)に立たされる。

短編「長引く悪寒」では、25歳で作家志望のアズベリー・ポーター・フォックス (Asbury Porter Fox) が不治の病を患ったと思い込み、死を覚悟してニューヨークから母と姉が暮らすジョージアの故郷に帰ってくる。自分の不幸の原因がすべて母のせいであると決めつけ、そのことを母に思い知らせようと、死後に読んでもらおうべく2冊分のノートに母への手紙をしたためている (364)。アズベリーは母への抵抗の証として、黒人についての芝居を書こうとして失敗したことがあり、また母の農場で働く2人の黒人に、母が禁じていることを承知のうえで搾乳場で3人で一緒にタバコを吸うことを提案し、「白人と黒人との違いが無に帰すコミュニケーションのひとつ (“one of those moments of communion when the difference between black and white is absorbed into nothing”)」(368)を味わったことがあった。また「黒人たちが飲むために使ったジャムのビン (“the jelly glass the Negroes drank out of”)」(369)を見つけると、アズベリーはそれで絞ったばかりの牛乳を飲んで人種隔離時代のタブーを破り、さらに自分が飲んだ後で2人の黒人にも同じビンから飲むように勧め、しかも売り物の牛乳に手を出すことで、母の禁止を二重に破ろうと企てた。

“Listen,” Asbury said hoarsely, “the world is changing. There’s no reason I shouldn’t drink after you or you after me!” (369)

ここでも、母の旧来の人種意識に反抗することを通して、自分がいかに人種の偏見のない広い心の持ち主であるかを印象づけようとしている。ところが結局、病気の原因が絞りたての殺菌されていない牛乳を飲んだことにあったことがわかり、皮肉な展開になる。また2度目にタバコの儀式を執り行おうと目論んだときには、黒人たちは彼の意図を理解しないまま箱ごとタバコをしまい込んでしまい、アズベリーは彼らと打ち解けた話もできず、結局は部屋の外で待機している母の助けを求めざるをえなくなり (380)、彼の差別意識の無さが表面的な装いでしかないことが露呈する。

こうして、息子たちは黒人を引き合いに出すことによって、かろうじて母に反抗するきっかけを手に入れるものの、実際には息子たち自身も母と同様の人種差別意識を抱えている様子が繰り返し描かれている。オコナーは人種問題を用いることによって、子供が母に対していただく分離の願望をダイナミックに表現すると同時に、いかに母と子が分かちがたく融合しているかを鮮やかに描き出すことが可能になり、その振幅の大きさを余すところなく劇化することができた。

結

オコナー作品の中で、息子ではなく娘から母に向けられる暴力が描かれている作品が1つだけある。1963年末から1964年にかけて執筆され、2月の手術前日に校了し、生前に雑誌に出版された最後の作品となった短編「啓示」だ。とはいえ厳密には、ここでの娘の暴力は、実の母ではなく、母の「分身 (“double”）」 (Hendin 102; Reuman 211) ・「片割れ (“twin”）」 (Whitt, “Flannery” 49) ・「鏡像 (“mirror image”）」 (Babinec 18) に向けられる。ミセス・ルービ・ターピン (Mrs. Ruby Turpin) は、自分が貧乏白人でも黒人でもないことにアイデンティティを見出している。彼女が診療所の待合室で唯一同類と認識するのが、「感じの良いレディ (“the pleasant lady”）」であり、この婦人は一緒に来ている無愛想な娘メアリ・グレイスに聞こえよがしに、氣立ての悪い人は救いようがないとミセス・ターピンに話す。会話を続けるこの

年配の婦人たちは、どちらも自負心が強く、他人を見下しているという点で共通している。母親が娘へのメッセージをミセス・ターピンを通じて間接的にしか伝えられないように、母親に対する娘の怒りの矛先も、間接的にミセス・ターピンに向けられる。しかも、ジョゼフィン・ヘンディンが指摘しているように、娘メアリ・グレイスの怒りが露わになるのは、ミセス・ターピンの先導によって、白人しかいない待合室で黒人の社会的地位の変化が話題になり始めるあたりからである (Hendin 123-24)。第2節で見たように、娘の場合、母親が強要する女性らしさへの抵抗が焦点となることが多かったが、ここではそこにさらに、息子が反抗する際の契機となっていた人種意識も動員されていると看做すことができる。

ただし、娘の母に向けての暴力の発露は、息子の場合以上に大きな代償を抱えることになる。娘は突如、ミセス・ターピンの顔をめがけて読んでいた分厚い本を投げつけ、その後飛びかかって首を絞めるという常軌を逸した暴力をふるう。

The book struck her directly over her left eye. It struck almost at the same instant that she realized the girl was about to hurl it. Before she could utter a sound, the raw face came crashing across the table toward her, howling. *The girl's fingers sank like clamps into the soft flesh of her neck.* She heard the mother cry out and Claud shout, "Whoa!" (Complete 499, 強調筆者)

母の分身であるミセス・ターピンの首にめり込んだメアリ・グレイスのこの指は、しかしながら次の瞬間には一転して、実の母の親指を「赤ん坊のように」握りしめ、母に向けられた怒りの強さの一方で、母なしには生きていけない様子が強調されている。

The doctor rose and handed the nurse the empty syringe. He leaned over and put both hands for a moment on the mother's shoulders, which were shaking. She was sitting on the floor, her lips pressed together, holding Mary Grace's hand in her lap. *The girl's fingers were gripped like a baby's around her thumb.* (501, 強調筆者)

放心状態の娘は母へのこの依存を意識化することはなく、救急車で運ばれる搬送先は、精神病院であることが示唆されている⁽¹⁷⁾。直前まで諭え話を用いて娘を間接的に非難していた母も、まるで別人のように床に崩おれて肩を震わせてすすり泣き、娘の暴力を前になすすべもない痛々しさを晒す。それはまるで、病気ゆえに母に全面的に頼る生活が続ける娘にとって、母に怒りをぶつけることが同時に自分の存在の基盤を根底から揺るがしかねないこと、またそれほどまでに母と娘が不可分に依存しあっていることを、オコナー自身が直観していたことを示すように思われる。だからこそ彼女は母と直接対決することができず、もっとも暴力的な作品においても、彼女の愛憎は母の分身を経由しなければならなかったのだろう⁽¹⁸⁾。

序にも述べたように、オコナーの長編小説2編はいずれも、宗教をめぐる葛藤を描いている。オコナーの場合に興味深いのは、この信仰心が、父や母ではないにしても、祖父や大伯父から受け継がれたものとして、つまり家族の問題として提示されることである。主人公の男性は、祖父や大伯父とそっくりな生き方を強要・運命づけられていることに対して抵抗しつつける。そもそも血縁による繋がりを有した設定になっていること、また必死で自己の自律性を守ろうとする葛藤が演じられる点で、ここでも繰り広げられているのは、母と娘に特有の自己の融合と分離をめぐる葛藤の変奏であると言ってもよいだろう⁽¹⁹⁾。特に時期からいえば、第1および第2短編集収録作品と並行して執筆された第2長編『烈しく攻むる者はこれを奪う』においては、フランシス・マリオン・ターウォーター少年は、誕生と同時に母を失い、続いて父も自殺したため、人里離れた土地で預言者だった大伯父の強烈な影響下で育てられる。ターウォーター少年にとって、大伯父メイスン・ターウォーター (Mason Tarwater) とは異なる自己の主張は、宗教の否定と分かちがたく絡み合っており、最終的には自己の主張の虚しさを思い知らされ、宗教に開眼し、大伯父と同じく預言者になることを受け入れる。

同じ屋根の下、自分の書斎のプライベートも守られない状態で、つねに母の娘であることを意識させられながら執筆しなければならない状況に置かれたからこそ、オコナーは自分の主題を発見したと同時に、その作品に異様な緊迫感が漲ることになったと言えるだろう。この緊張感から目をそらすことなく、そのダイナミズムを究明するためにオコナーがかろうじて見出した唯一の心理的に安全な方法が、娘と母の問題を息子という「仮面」を通して描くことだっ

たのではないだろうか。

《注》

- (1) オコナーがアイオワの大学院で指導を受けた教員には、アンドルー・ライトル (Andrew Lytle, 1902-1995), および客員教員として訪れたジョン・クロウ・ランサム (John Crowe Ransom, 1888-1974) やアレン・テイト (Allen Tate, 1899-1979) やロバート・ペン・ウォレン (Robert Penn Warren, 1905-1989) がおり、ニュークリティシズムの担い手となった彼らの多くは、1920年代・30年代に南部でフェュージティブ・農本主義運動の中心で活動した作家・詩人・批評家たちだった。彼らの影響下で、文壇で評価されるためには、男性的=ジェンダーレスである必要をオコナーは強く意識することになった。またテイトの妻でもある作家キャロライン・ゴードン (Caroline Gordon, 1895-1981) も、女性軽視・嫌悪の傾向を内面化しており、ゴードンから技法上のアドヴァイスを得ることになったオコナーは、こうした面でも影響を受けることになった。このような風潮の中、2つの長編 (特に第1長編) をリヴァイズする過程で、女性登場人物たちの存在が周縁化されていき、結果として男性主人公を中心とする物語としてまとまった経緯も、キャサリン・ヘンブル・ブラウンの草稿調査によって跡付けられている。Prown, および以下の注(3)を参照。
- (2) 第1短編集と第2短編集とのあいだで、扱われる親子関係において子供の性別が変化することに注目しているのは、Whitt, *Understanding*; 照沼。変化に特に着目せずに親子関係一般について論じているのは、Westling, *Sacred*; Hendin; Katz; Reuman; Garson, また変化に特に着目せずに母娘関係を論じているのは、Westling, “Flannery”; Babinec。
- (3) 唯一の例外は、短編「不意打ちの幸運 (“A Stroke of Good Fortune”)」であり、この作品の初出は1949年で、帰郷前に執筆されている。『賢い血』の草稿を研究したキャサリン・ヘンブル・ブラウンによれば、1947年の段階で既にかかれていた長編小説5章分の中に、ヘイゼルの姉ルービについての長いセクションが存在しており、1948年にライトルの指導のもと長編小説をリヴァイズする過程で、この部分が削除されたい。この削除された部分を元に短編としてまとめ、初め「階段の女 (“The Woman on the Stairs”)」のタイトルで、また後に現在のタイトルに変更して出版された。内容的に、女性の視点から描かれており、妊娠と墮胎を扱っていたことが、長編小説から削除された理由だったのではないかとブラウンは推察している (Prown 111-12)。
- (4) 10短編のうち、母娘を扱った4編以外で扱われている家族関係は、祖父と孫娘1編、祖父と孫息子1編、祖母と息子夫婦と孫たち1編、両親と息子とベビシッター1編、妊娠した妻と夫1編である。残りの1編では、農場主の女性と使用人家族たちを中心に物語が展開する。Whitt, *Understanding* 42も参照。
- (5) 以下、オコナーの短編小説からの引用は、すべて *Complete Stories* 版を用いる。

- (6) この見世物小屋の両性具有のエピソードは、1953年に地元のフェアに行った使用人の娘から聞いた話に基づいていることが、1954年9月13日付のオコナーの書簡からわかる (*Flannery O'Connor: Collected* 925)。この書簡は *Habit* には未収録。
- (7) 書簡集にはフロイトへの言及が複数回見られる。例えば、1955年の手紙には、以下の言及がある。“As to Sigmund, I am against him tooth and toenail but I am crafty: never deny, seldom confirm, always distinguish. Within his limitations I am ready to admit certain uses for him.” (*Habit* 110)
- (8) 収録されている9短編のうち、母息子を扱った4短編以外には、夫婦関係を中心に扱ったものが2編、祖父と孫娘1編、父と息子1編、父と娘1編がある。Whitt, *Understanding* 114も参照。
- (9) マーサ・チューは、オコナーの両短編集に登場する一連の「醜く無作法な娘たち」に注目し、ハルガ・ホープウェルやヴェージニア・コープや「精霊の宿る宮」の名前のない主人公の少女、メアリ・フォーチュン・ピッツ、メアリ・ジョージ・フォックス、メアリ・エリザベス、メアリ・グレイスの名を挙げている (Chew 20)。しかし彼女は特にメアリの名前の意味を考察してはいない。
- (10) アトランタで通学した学校に関しては、2種類の説がある。1988年出版のサリー・フィッツジェラルドによる年表および2002年出版のジーン・キャッシュの伝記によれば、“parochial school of St. Joseph’s Church”とあり、カトリック系の学校とされている (Fitzgerald 1238; Cash 26)。これに対して、2008年出版のセアラ・ゴードン作成の年表と2009年出版のブラッド・グーチの伝記によれば、“North Fulton High School”とされている (Gordon, *Literary* xv, 19; Gooch 63)。グーチによれば、オコナーが1年間通ったこの学校は、「拡大しつつあったアトランタの北端に白人の子供を教育する目的で1932年に作られた人種別の公立校」だった。ゴードンは、オコナーにとっての初めての公立校体験であったことを指摘している。
- (11) 大学の公式ホームページからの情報 (“History”)。Georgia State College for Women は、現在は共学となり、Georgia College and State University に改称。メリアット・リーの兄ロバート・E・「バズ」・リー (Robert E. “Buzz” Lee) が、この大学の学長だった時期は1956-1967年 (Gordon, *Literary* 28)。
- (12) オコナーがヤドローに滞在した1948年の滞行者リストの中には、黒人作家チェスター・ハイムズ (Chester Himes, 1909-1984) やアーナ・ボンタン (Arna Bontemps, 1902-1973) の名前がある (McGee 10, 130)。
- (13) オコナーは、1959年4月25日付のメリアット・リー宛ての手紙ではボールドウィンを作家として高く認めていたが (*Habit* 329)、1964年5月21日付のリー宛ての手紙からは、彼があらゆる問題に関して専門家気取りで発言することに対して快く思っていなかった様子も窺われる。“About the Negroes, the kind I don’t like is the philosophizing prophesying pontificating kind, the James Baldwin kind. Very ignorant but never silent. Baldwin can tell us what it feels like to be a Negro in Harlem but he tries to tell us everything else too. ... My question is usually, would this person be endurable if white? If

Baldwin were white nobody would stand him a minute.” (*Habit* 580)

- (14) その一方で、1963年6月に起きたこの殺害事件にいち早く反応し、短編「その声はどこから来るのか (“Where Is the Voice Coming From?”)」を書いたのもウェルティである。この短編は『ニューヨーカー (*The New Yorker*)』6月26日号に掲載されたが、オコナーは1963年9月1日付の知り合いに宛てた手紙の中で、ウェルティが人種問題を扱ったこの短編を北部の雑誌に掲載したことを批判していた (*Habit* 537)。1964年1月3日付の別人に宛てた手紙では、自分の短編「啓示」は『エスクワイア (*Esquire*)』に掲載することもできただろうが、自分としてはこの短編は様々な理由から南部の雑誌に掲載したかったので『スワニー・レビュー (*Sewanee Review*)』に送ることにした、と書いている (*Habit* 560)。この発言は、ウェルティを批判した前述の手紙と並べて読むと示唆的である。人種問題が大きく扱われている短編「啓示」を、オコナーは南部の読者を想定して執筆していたと考えられる。より肯定的な反応を得られやすい北部の読者ではなく、人種問題を肌で知っている南部の人びとに作品を「体験」してもらいたかったのではないだろうか。一方のウェルティは、『ニューヨーカー』誌に件の短編が掲載されたことによって、(KKKが嫌がらせとしてよくやるように)十字架を庭で燃やされるような余波はなかったかとニューヨークの人から気遣われた際に、彼女は、その種の人びとが『ニューヨーカー』など読まないことは、南部の人だったら誰でも知っていると応答したとされており (Waldron 268)、この発言からも、北部の雑誌への投稿が、多くの南部の人の目に触れないこと、つまり読者として北部の人びとを想定してのものだったことが裏付けられる。
- (15) 拙論「娘にとっての南部——エリザベス・スペンサーの「暮れがた」——」を参照。
- (16) Lillian Smith, *Killers of the Dream* (1949); Sarah Patton Boyle, *The Desegregated Heart* (1962) 特に第2章と第3章; Virginia Foster Durr, *Outside the Magic Circle* (1985) 特に第1章などを参照。フレッド・ホブソンは白人作家の回想録において人種意識の回心が生じる様子を指摘する著書の中で、これらの作家についても論じているが、特に母親との関係に焦点を当ててはいない (Hobson)。スミスの母との関係については、拙論「リリアン・スミスの「二つの臍帯」——『奇妙な果実』と『夢を殺す者たち』を中心に——」を参照。
- (17) 待合室にいた貧乏白人の女性は、この娘は今に狂人 (“lunatic”) 扱いされるだろうと繰り返し (*Complete* 501, 501)、また農場でミセス・ターピンを慰める黒人女性は、そんな人は精神病院送りがふさわしいと発言している。“‘She b’long in the sylum,’ the old woman said emphatically.” (505)
- (18) オコナーが息子という「仮面」を用いることになった理由として、第4節の議論に追加すべきもう1つの実際的な理由は、自分の母親を傷つけることなくこの問題を追究することだったとも言えるだろう。オコナーは第1短編集出版から半年後の1956年に、自分の創作が母に与える影響を心配していた旨の発言をしている。「かつて私も、自分が書くことによって母の寿命を縮めることになるだろうと感じていましたが、後になってそれが自分の驕りであることを発見しました。母親たちは私たちが考えるよりもずっと頑丈なものです」 (*Habit* 139)。実際、

オコナーの母は娘の書くものを読んでいたことが、オコナーの書簡から読み取れる。母は『賢い血』の原稿を読もうとしつつ、9ページ目で眠ってしまったり(27)、『烈しく攻むる者はこれを奪う』も読もうとするが、家事が気になり何度も席を立つために、なかなか読み進まなかった(340)。長編についてのこうした母の反応を面白おかしく記録する一方で、「自分が短編のほうを好んで書くのは、母が1度に読みきることができるからではないか」(340)と彼女は語り、短編「すべて上昇するものは一点に集まる」については、「母はますます気に入ったようです。私の短編を読むと大抵は眠くなってしまおうようなのですが」(499)とも綴っていた。

- (19) この点に関する先行研究として、後藤和彦は『賢い血』の母の重要性を強調する論文の中で、宗教のテーマの特異な扱われ方を分析している。「言うなれば、ヘイズにとって母の存在は、彼にとって抜き差しならぬ重大なふたつの問題——すなわち、イエスの問題と性の問題——の接点となっているということだ」(77)と後藤は指摘し、この母と息子の関係が、第2長編小説の「ジェネレーションを隔てた様々な肉親間の愛憎関係として連綿と受け継がれている。そして恐らくその様々な関係は、多かれ少なかれすべて「母と子」の関係のヴァリエーションなのであり、それらの基底には、やはり、作家自身とその実母レジーナとの関係がひそんでいたのだと思う」(79)とまとめている。

《引用文献》

- Babinec, Lisa S. "Cyclical Patterns of Domination and Manipulation in Flannery O'Connor's Mother-Daughter Relationships." *The Flannery O'Connor Bulletin* 19 (1990): 9-29. Print.
- Benjamin, Jessica. *The Bonds of Love: Psychoanalysis, Feminism, and the Problem of Domination*. New York: Pantheon, 1988. Print.
- Boyle, Sarah Patton. *The Desegregated Heart: A Virginian's Stand in Time of Transition*. 1962. Charlottesville: UP of Virginia, 2001. Print.
- Cash, Jean W. *Flannery O'Connor: A Life*. Knoxville: U of Tennessee P, 2002. Print.
- Chew, Martha. "Flannery O'Connor's Double-Edged Satire: The Idiot Daughter versus the Lady Ph.D." *The Southern Quarterly* 19 (1981): 17-25. Print.
- Chodorow, Nancy J. *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. 1978. Berkeley: U of California P, 1999. Print.
- DuRocher, Kristina. *Raising Racists: The Socialization of White Children in the Jim Crow South*. Lexington: UP of Kentucky, 2011. Print.
- Durr, Virginia Foster. *Outside the Magic Circle: The Autobiography of Virginia Foster Durr*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1985. Print.
- Fitzgerald, Sally. "Chronology." *Flannery O'Connor: Collected Works*. New York: Library of America, 1988. 1237-56. Print.
- Fowler, Doreen. "Flannery O'Connor's Productive Violence." *Arizona Quarterly*

- 67 (2011): 127-54. Print.
- French, William W. "Maryat Lee." *The West Virginia Encyclopedia*. West Virginia Humanities Council, 7 Oct. 2010. Web. 10 Sept. 2012. <<http://www.wvencyclopedia.org/print/article/1338>>.
- Garson, Helen S. "Cold Comfort: Parents and Children in the Work of Flannery O'Connor." *Realist of Distances: Flannery O'Connor Revisited*. Ed. Karl-Heinz Westarp and Jan Nordby Gretlund. Aarhus, Denmark: Aarhus UP, 1987. 113-22. Print.
- Gooch, Brad. *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*. New York: Little, 2009. Print.
- Gordon, Sarah. *Flannery O'Connor: The Obedient Imagination*. Athens: U of Georgia P, 2000. Print.
- _____. *A Literary Guide to Flannery O'Connor's Georgia*. Athens: U of Georgia P, 2008. Print.
- _____. "Maryat and Julian and the 'not so bloodless revolution.'" *The Flannery O'Connor Bulletin* 21 (1992): 25-36. Print.
- Hendin, Josephine. *The World of Flannery O'Connor*. Bloomington: Indiana UP, 1970. Print.
- "History, About Georgia College." *Georgia College*. Georgia College, n.d. Web. 10 Sept. 2012. <<http://www.gcsu.edu/about/history.htm>>.
- Hobson, Fred. *But Now I See: The White Southern Racial Conversion Narrative*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1999. Print.
- Katz, Claire. "Flannery O'Connor's Rage of Vision." *American Literature* 46 (1974): 54-67. Print.
- Lee, Maryat. "Flannery, 1957." *The Flannery O'Connor Bulletin* 5 (1976): 39-60. Print.
- Marrs, Suzanne. *Eudora Welty: A Biography*. Orlando: Harcourt, 2005. Print.
- McGee, Micki. *Yaddo: Making American Culture*. New York: Columbia UP, 2008. Print.
- O'Connor, Flannery. *The Complete Stories of Flannery O'Connor*. New York: Farrar, 1971. Print.
- _____. *Flannery O'Connor: Collected Works*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Library of America, 1988. Print.
- _____. *The Habit of Being: Letters*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Farrar, 1979. Print.
- Porter, Katherine Anne. "Gracious Greatness." *Critical Essays on Flannery O'Connor*. Boston: G. K. Hall, 1985. 65-67. Print.
- Prown, Katherine Hemple. *Revising Flannery O'Connor: Southern Literary Culture and the Problem of Female Authorship*. Charlottesville: UP of Virginia, 2001. Print.
- Reuman, Ann E. "Revolutionary Fictions: Flannery O'Connor's Letter to Her

- Mother.” *Papers on Language and Literature* 29 (1993): 197-214. Print.
- Ritterhouse, Jennifer. *Growing Up Jim Crow: How Black and White Southern Children Learned Race*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2006. Print.
- Smith, Lillian. *Killers of the Dream*. 1949. New York: Norton, 1994. Print.
- Spencer, Elizabeth. *Landscapes of the Heart: A Memoir*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998. Print.
- Waldron, Ann. *Eudora: A Writer's Life*. New York: Anchor, 1999. Print.
- Walker, Alice. “Beyond the Peacock: The Reconstruction of Flannery O'Connor.” 1975. *In Search of Our Mothers' Gardens*. San Diego: Harcourt, 1983. 42-59. Print.
- Westling, Louise. “Flannery O'Connor's Mothers and Daughters.” *Twentieth Century Literature* 24 (1978): 510-22. Print.
- . *Sacred Groves and Ravaged Gardens: The Fiction of Eudora Welty, Carson McCullers, and Flannery O'Connor*. Athens: U of Georgia P, 1985. Print.
- Whitt, Margaret. “Flannery O'Connor's Ladies.” *The Flannery O'Connor Bulletin* 15 (1986): 42-50. Print.
- Whitt, Margaret Earley. *Understanding Flannery O'Connor*. Columbia: U of South Carolina P, 1995. Print.
- Wood, Ralph C. *Flannery O'Connor and the Christ-Haunted South*. Grand Rapids: William B. Eerdmans, 2004. Print.
- 後藤和彦. 「「聖」と「性」のはざま『賢い血』における母のまなざしをめぐって——フラナリー・オコナー伝記的研究のための予習——」『英米文学評論』39 (1993): 61-80. Print.
- 照沼かほる. 「Flannery O'Connorの母娘物語にみる女性像」. 『アメリカ文学』57 (1996): 7-16. Print.
- 利根川真紀. 「娘にとっての南部——エリザベス・スペンサーの「暮れがた」——」. 『英語青年』2004年5月: 14-15. Print.
- . 「リリアン・スミスの「二つの臍帯」——『奇妙な果実』と『夢を殺す者たち』を中心に——」. 『言語と文化』2 (2005): 199-221. Print.

(アメリカ文学／文学部教授)